

シゴトビト

SHIGOTO-BITO

不妊治療「命の源」つくる

受精から胚になるまで

望んでも子どもに恵まれない男女に対して、医療的な補助を行う「不妊治療」。そのなかで胚培養士は、人工的に男性の精子と女性の卵子の受精を促し、「胚」と呼ばれる状態までもつていく重要な役割を担う。胚は女性の胎内で成長し、やがて赤ちゃんになる。いわば「命の源」をつくる仕事だ。

たとえば「体外受精」という治療法では、男女から採取した精子と卵子を受精させるのだが、精子も卵子も受精に適したものばかりではない。顕微鏡をのぞいて良い状態の精子と卵子を選び出すところから仕事は始まる。仮に受精に成功したとしても、無事に胚になるかどうかはケース・バイ・ケースで、うまくいかないことも少なくない。成長した胚を女性の子宫に移植し、妊娠が確認できるまでは全く気が抜けない。

少子化が大きな社会問題になるな

かで、胚培養士の重要性は年々増している。日本産科婦人科学会が今年8月に発表したまとめによると、不妊治療の保険適用が始まった2022年に体外受精で生まれた子どもの数は前年から7000人以上増え、過去最多の7万7206人だった。新生児の約10人に1人が体外受精で生まれた計算になる。

とはいっても、不妊治療に何度もチャレンジしても妊娠できず、子どもを持つ夢を諦めざるを得ないケースもある。治療費は高額で、当事者たちの心身の負担も大きい。限られたチャンスを無駄にしないように、常に多くの作業を集中して作業しています」と寺原さん。

細かい作業が多く、手先の器用さや根気も求められるが、担当した女性の妊娠がわかると、苦労が報われるという。寺原さんは「私たちの判断や作業が妊娠の成否を左右します。責任は重大ですが、一人でも多くの人に喜んでもらいたい一心で頑張っています」と笑顔で話してくれた。

HISTORY

1995年 神奈川県横浜市で生まれる
2014年 神奈川県立市ヶ尾高校卒業
2018年 日本歯医生命科学大学卒業
みなとみらい夢クリニックに就職

大学パンフで「向いているかも」

高校3年で進学先に迷っていたとき、たまたま手に取った大学のパンフレットに、胚培養士として活躍している卒業生が紹介されていた。生物学が好きで、手先の器用さに自信があったことから、「こんな仕事があるんだ。私に向いているかも」と興味を持った。不妊に悩む男女が多いことは知っていたので、将来、不妊治療の重要性が増していくのではないかと考え、その大学に進むことを決めた。大学では応用生命科学部を選び、卒業研究でも受精卵をテーマとした。卒業とともに現在のクリニックに就職し、胚培養士になる夢をかなえた。

Q. オフの日の過ごし方は?

A. 旅行

大の「島」好き。長期の休みが取れたときは伊豆大島や神津島、新島などに出かける。何をするわけでもなく、自転車に乗って島を巡ったり、ボートしたりする時間が好き。日頃の緊張感をそこで解きほぐしている。



Q. 胚培養士になるには?

A. 大学で医学や生物学、農学を学ぶ

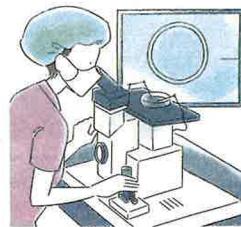
国家資格はないが、大学や大学院で医学や生物学、農学などを学ぶ必要がある。勤務先となる医療機関の募集要項でも、そうした学問領域を専攻したことが求められる。臨床検査技師が胚培養士になることが多い。



Q. どんな人が向いている?

A. 手先が器用な人

胚培養士の仕事は細かい作業が多い。卵子や精子を取り扱う器具も、ガラス管を熱し、左右に引っ張って極細にしたものを自作する。卵子や精子は目に見えないほどの大きさで、顕微鏡をのぞきながらの作業ばかりで集中力も求められる。



胚培養士

寺原 小貴さん(29歳)
みなとみらい夢クリニック

◆ 寺原さんの1日

- 7:00 出社
- 7:15 培養中の胚の観察
- 8:30 採卵
- 10:30 昼食休憩
- 11:30 体外受精などの作業
- 14:00 胚の移植
- 15:00 書類作成
- 16:00 退社

マストアイテム



胚培養士にとって欠かせないのが「顕微鏡」。勤務先のクリニックが開発に関わったニコンの新たな顕微鏡のおかげで、従来のものよりも卵子の細胞内や精子の頭部がクリアに見られるようになった。